

昭和13年(1938)7月5日の阪神大水害の惨状

怒涛のような山津波が押し寄せる

大神戸を瞬く間に濁流に巻き込んだ昭和13年7月5日の水害は、神戸市空前の大惨事になった。市街の北側山ろく地帯から南海岸通りに注ぐ都賀川、生田川、青谷川などの6河川と宇治川谷から氾濫した濁水が流れ込み、市内の3分の1が濁流に埋まった。

土砂崩れのため、市内の背後の山は所々赤土が露出した。神戸市名物の錨山などからの濁流が急な坂を猛烈な勢いで宇治川筋を南進し、元町三越に進路を阻まれた濁水は、元町、栄町および神戸駅方面に分流し猛威を振るった。

生田川を中心とする葺合区(現中央区)一帯は、土砂の混じった濁流に襲われ、山ろくに並ぶ別荘地帯は渦巻く氾濫水に埋まってしまった。西方の須磨区でも流水が首を没するほどだった。

住吉川流域は、六甲山腹の山崩れにより幾百貫、幾千貫の岩石、巨木などが幾重にも散乱し、惨たんたる光景を呈した。津波のように押し寄せた激流は、住吉村、本山村一帯を一飲みにし、住友吉左衛門、安宅、八代など名士の邸宅を一瞬のうちに打ち壊し、埋め尽くし、邸内には付近の人々の死体が流れ込んだ。



鉄路は至る所で、橋梁破損、軌道埋没などが続、最も惨状を極めた省線（JR）住吉駅構内には面に、戸障子、畳、仏壇、などが赤土と岩石のに埋まり、列車三本が傾斜したまま泥下に埋没した。

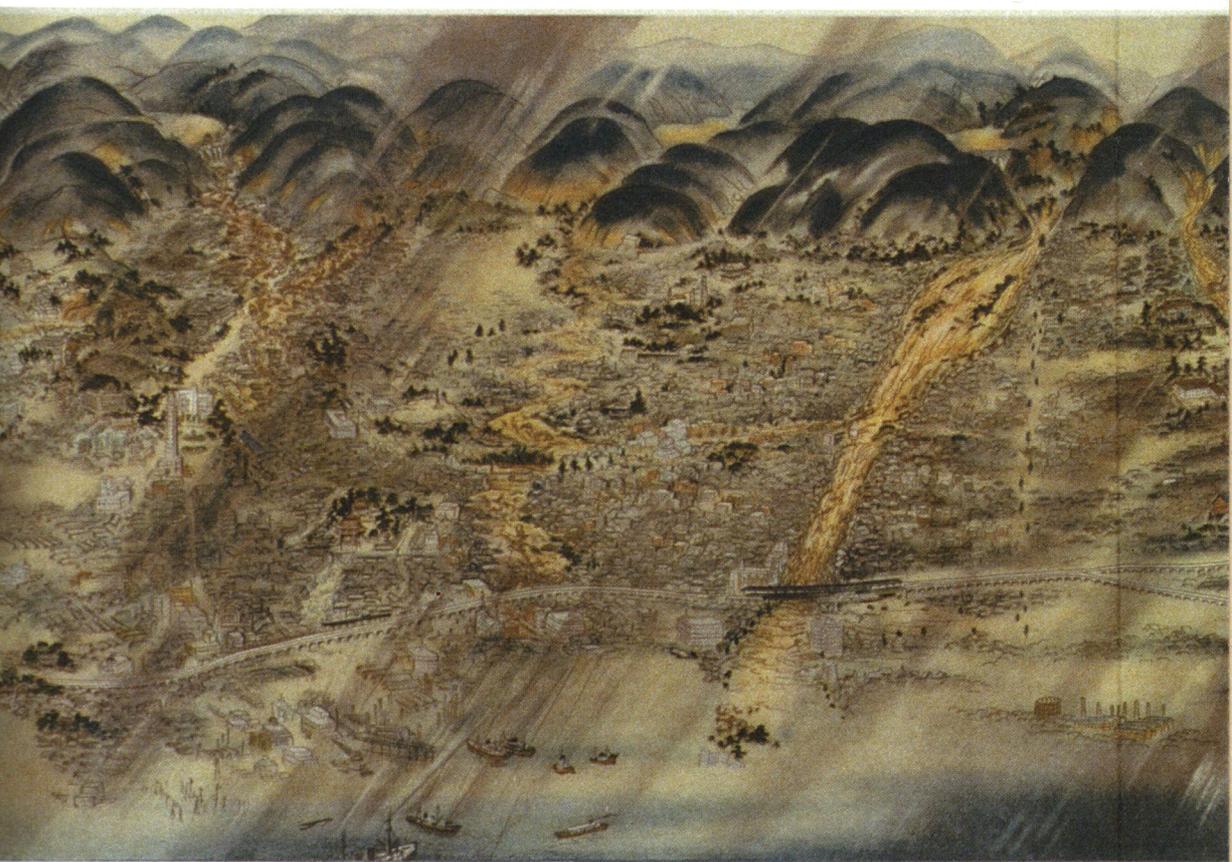
この水害を活写した文学とくれば、谷崎潤一郎「細雪」であろう。「六甲の山奥から溢れ出し山津波なので、真っ白な波頭を立てた怒濤が飛を上げながら、後から後からと押し寄せて来る…」と、山津波を表現している。

この年、6月初旬から梅雨の雨がほぼ連日のよ

うに降り、山はたっぷりと水を含んだ。7月に入り、梅雨前線が瀬戸内海で停滞し、悪いことに3日から5日にかけて熱帯低気圧が接近した。

神戸海洋気象台の観測では、7月3日夕方から豪雨が降り始め、特に5日午前8時から正午までは1時間に41ミリを越す猛烈な雨で、5日の日雨量は268ミリ、3日から5日までの合計雨量は462ミリ、六甲山上では総雨量616ミリに達した。

この記録的な豪雨により、急傾斜地はしきりに崩壊し、市内のすべての河川は氾濫し、流木や岩塊を混じえた土石流は市中に流れ込み、100万人



が住む市街地は一気に泥の海と化した。死者・行方不明521人、流失家屋1,786戸、全壊家屋3,905戸、市の面積の26%が影響を受けた（新修神戸市史1989年刊）。明治以来、憂慮されていた六甲山地の荒廃による土砂災害が現実なものとなったのである。

神戸市街地は、土砂災害の起こりやすい条件がそろっている。雨のもとになる上昇気流の生じやすい山があり、急傾斜の山地とそれを作る風化の進んだ花こう岩地にある、さらに土砂の堆積した扇状地にあることなどである。

この扇状地を襲った土砂災害は、明治以降のものでも、明治29、昭和13、36、42年などがあり、いずれも梅雨期に発生している。明治の災害から一世紀にわたり、関係者の努力によって神戸市民の生命を守る、六甲山の「緑の衝立（ついたて）」がほぼ完成した。よみがえった緑は、防災まちづくりに大きな力となったが、それにしても1995年に神戸市が今度は阪神大震災に遭うとは、不運というほかに言葉がない。

宮澤清治／元神戸海洋気象台長

